

## 〈論文〉

## 「御苦労」系劳い言葉の変遷

倉持 益子

キーワード：御苦労，御苦労様，目上，目下，劳い言葉，

## 1. はじめに

よく、年配の方から「ご苦労さま」の使い方についての質問を受ける。目上の人に使ってはいけないと言われたが本当かというものから、若い人から言われて不快に思うが、これが目上に使えないということがわからないのだろうかというものであったりする。おそらく、前者は経験上、広く使える劳いの言葉と思っていたのを否定された戸惑いであり、後者は、常識だと思っていたことが通じなかった怒りであろう。このように、この劳いのあいさつは、混乱と戸惑いの中にある。

たしかに、1970年代以来、言葉遣いやマナーの本では上司に対しては使うべきではない表現<sup>(1)</sup>とされ、さらに国語辞典でも80年代以降、目上に対しては使いにくいとの記載があるものが増えている。しかし、目上に使う例も現在たしかにある。また、平成17年度文化庁国語に関する世論調査の調査（以下文化庁17年度調査）<sup>(2)</sup>でも、年齢が上がるにつれて目上への使用が増えるという報告もある。「御苦労様」は目上へは使えないというのは、どのような経緯で広まったのであろうか。本研究は、現代の使い方と江戸期以来の使用法の変化を探り、この語の本質を考察したものである。

## 2. 先行研究

「ご苦労系」が主君からの劳いに発するという事に異を唱えた先行研究は、飯間（2003）、萩野（2005）がある。いずれも江戸期にはむしろ目上に対する劳いの言葉として使われ、目上からの劳いは（武家の場合）「大義」が多かったことを歌舞伎・浄瑠璃本等の例から指摘している。このことは、本研究で行った追調査からも同じ結果が得られた。

現在での使い方に関しては、文化庁17年度調査が、帰りのあいさつとして「お疲れさま」「ありがとうございました」「その他」との比較を行った。その結果、目上に対してより、目下に対して使う傾向と共に、他の年代より60代に使用者が多いという結果となった。

### 3. 本研究の調査方法

本研究は、先行研究の追調査として、江戸期の通俗本から使用例を探った。使用した通俗本は、歌舞伎の読み本版と滑稽本、さらに落語（幕末）である。これらを取り上げた理由は、会話が中心になっているため、労い表現の採集が容易だからである。また、現代につながる変化として、インターネットサイト『青空文庫』<sup>(3)</sup>を中心とした明治初頭から昭和30年代までの文学作品における使用例を分析した。昭和30年以降から現在へは、インターネット、雑誌、新聞等のメディアにおける事例や辞書の記載や生活上耳にした使用例を収集した。

### 4. 現在の使い方

#### 4.1 辞書での扱い

辞書での記載は、日常生活の使用の拠り所となる。そのため、どのように扱われているのか9種の主要な辞書を比較した。そのうち、広辞苑と小学館の日本国語大辞典を除く7種に上下関係についての記述があった。

×は声をかける対象の上下関係についての記載なし ○は記載あり

表1

発行年	学研 国語大辞典	三省堂 国語辞典	大辞林	集英社 国語辞典	岩波 国語辞典	新選 国語辞典	明鏡 国語辞典
1980	初版×						
1982		第三版×					
1988	第二版○		初版○				
1992		第四版○					
1993				初版○			
1994					第五版×		
1995			第二版○				
2000					第六版○	第七版×	
2002						第八版○	初版○
2006			第三版○				

※大辞林は、同じ○でも版によって記載内容が変わっている。

最も早く現れたのが、1988年の学研国語大辞典と大辞林である。学研国語大辞典は、初版と第二版では記載内容が一部変わっている。

学研国語大辞典初版（1980年）ごくろう〔御苦労〕（名・形動）

「苦労」の丁寧語

（参）他人のほねおりをねぎらう言葉として、また他人の行為・努力をあざける言葉としても使う。

学研国語大辞典第二版（1988年）ごくろう〔御苦労〕（名・形動）

「苦労」の丁寧語

(口) 目上の人に言うのは失礼とされる。

「御苦労」というのは、現在では口語としての使用ではあまり聞かず、あったとしてもぞんざいな印象は否めない。しかし、「御苦労様」ともなると、ぞんざいさはあまり感じられない。しかし、上下関係に言及する辞書は、この両者を分けていないものが7種中5種であった。

「御苦労」と「御苦労様」を分け、上下関係について述べているものは以下の2種である。

明鏡国語辞典初版 (2002年)

ごくろう〔御苦労〕(名・形動)

相手の骨折りをねぎらってという語。「どうも——さん」

ごくろうさま〔御苦労様〕(感・形動)

相手の骨折りをねぎらって、丁寧という語。「遅くまで——でした」

▷目上の人に対しては「お疲れ様」を使うほうが自然

大辞林第三版 (2006年)<sup>(4)</sup>

ごくろうさま〔御苦労様〕(名・形動)

「御苦労」をさらに丁寧という語。普通、目上の人には使わないほうがよいとされ、「お疲れさま」を使うことが多い。

2002年明鏡国語辞典初版と2006年大辞林第三版は、いずれも婉曲な表現ながらも目上への使用には否定的で、しかも「お疲れさま」がふさわしいとしている。

## 4.2 文化庁調査から

文化庁17年度調査によると、職場で別れるとき、自分より職階が下の人に対して60代の41.3%が「ご苦労さま (でした)」と声をかけるとした。これは、「お疲れさま」の42.9%とほぼ同じである。さらに、自分より階級が上の人に対しても60代の20.2%が「ご苦労さま (でした)」を選んでいる。「ご苦労さま」は、50代より年配者が使う傾向が見て取れる。

## 4.3 現在における目上や敬意対象者への使用例

以下は、目上など敬意を表すべき人への使用例である。

### 例1 弟子から師匠へ

落語家の会話。楽屋で師匠を迎えて弟子が挨拶する。

「よう。」

「あ、師匠ご苦労さまです。」

尾瀬あきら，どうらく息子，ビッグコミックオリジナル 2010 年 12 月 20 日号，p150

## 例 2 後輩から先輩へ

プロ野球のロッカールーム。引退する大選手に 20 歳ほども若い選手が声をかける。

「本当に長い間ご苦労さまでした」

「そうだな，長かったな…」

水島新司，あぶさん，ビッグコミックオリジナル 2009 年，10 月 20 日号，p101

## 例 3 新聞の見出し

「角界に尽くして 45 年…東関親方ご苦労さま」

スポニチ，2009 年 5 月 25 日掲載

## 例 4 商店街のアナウンス

「町内の皆様，ご苦労さまです」

世田谷区の下高井戸商店街で，商店街理事が車のマイクから通行人へ呼びかけ 2009 年 10 月

## 例 5 集会のあいさつ

委員長「皆様，お暑いところ大変御苦労さまでございます。」

インターネット上に記録された集会の議事録から<sup>(5)</sup>

例 1 に，もし代わりの言葉が入るとすれば「おはようございます」あたりになるが，「ご苦労さま」の方が敬意と気持ちが入っているのではないか。また，例 2 も 3 も敬意と気持ちが十分感じられる。たしかに「お疲れさまでした」も使えるであろうが，すでに日常的あいさつ言葉と化している「お疲れ」より，特別な時の労いの重さが現れているのではないか。例 4 に関しては，買い物客に「お疲れさま」では，妙な馴れ馴れしさが出てしまう。年配客が多い同商店街での呼びかけに違和感はない。年配が多い場合，開会を告げる言葉が「お疲れさま」であったら，違和感を与える可能性がある。「ご苦労さま」なら，遠路わざわざ来てくださってというニュアンスが伝わると考えられる。

### 4. 4 現代の使い方の特徴と問題点

現在，多くのビジネス書や，ビジネスマナーを指南するインターネット上のサイトには，「目上には使えない」とある。したがって，会社組織の中でのあいさつとしては，それが常識になっていると見て間違いはない。しかし，日常生活の中では，集会の挨拶をはじめ，目上等敬語で遇すべき存在にそれを使ってもおかしくない場面はたしかにある。

また、文化庁の調査からも、わずかではあるが年齢が上がるにつれて、別れのあいさつで使用する人の割合が高くなっている。辞書の記載もはっきりと使ってはいけないとしているのではなく、使っていない傾向を述べているに過ぎない。またその原因を歴史的経過から説明しているものはない。

以上のことから、「ご苦勞さま」が目上に使わないほうがいいというのは常識化されてはいるものの、明確な根拠を持たず、しかも近年の傾向に過ぎない可能性が出てきた。

## 5. 江戸期の使い方

この節では、18世紀後半から19世紀における江戸期の「御苦勞」の使用例を紹介する。

医者と大家衆との通りでのあいさつ

医者「これは御番、ご苦勞。いつもよくお勤めなされます」

大家「これは忝いご挨拶。」

唐辺僕術（安永三年1774年）茶のこもち「自身番」<sup>(6)</sup>

不在の理由を関係者に知らせる

「お長屋の衆、大きに御苦勞様で、実は新吉は、私に 扱（よんどころ）ない用事があって、此方（こちら）へ参って居る留守中に師匠が亡なりまして、皆さん方が 態々（わざ／＼）知らして下さって有難うございます。」

三遊亭円朝（安政6年1859年）真景累ヶ淵<sup>(7)</sup>

江戸期のテキストでは、「御苦勞系」は23例と数こそは少ないが、その使用対象を見ると、20例が敬意を表すべき相手。3例が友人、2例が、使用人等仕事を行った者であった。このように使用例の多くが敬意を示すべき人に使われている。

## 6. 明治から昭和における使い方（1868年から1959年まで）

この節では、敬意表現の色合いが強い江戸期の後の「御苦勞」系の使用法を見てみる。資料の多さということから、分析対象を文学作品にした。

## 6.1 対象者別グラフ

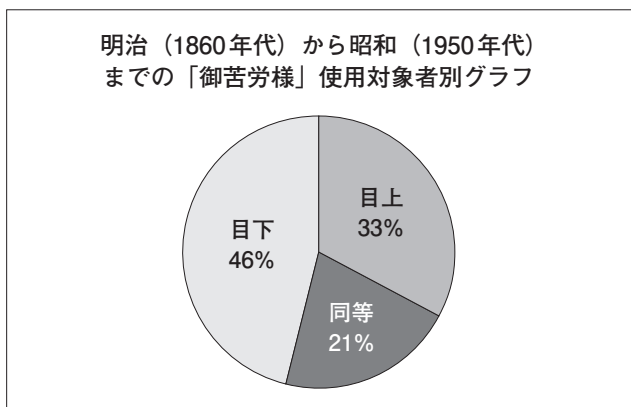


図1

グラフで見ると、たしかに目下への使用例が最も多い。しかし、目上と中間を合わせると、目下以外の使用は53%となり、目下への使用を上回る。すなわち、明治以降も「御苦労」系労い言葉は必ずしも上司が部下に掛ける言葉とは言えない。

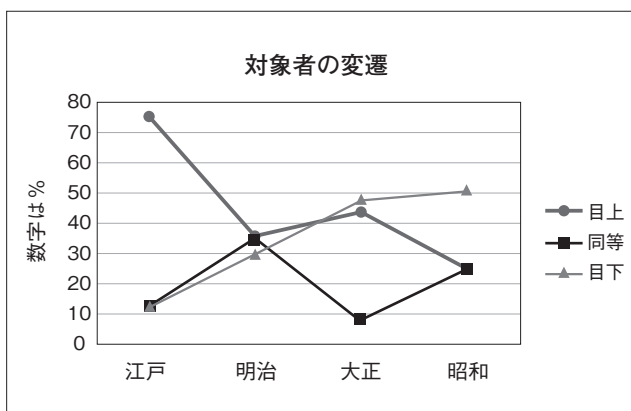


図2

明治前期までは目下への使用は少なかった。しかし、明治から大正に移る頃を境に目下への使用が完全に上回っている。このグラフの数値は%表示のため、昭和の初期までは使用の実数が減ったというのではない。相変わらず多い目上への使用を、さらに増加した目下への使用が上回ったということである。

では、目下への使用例が増えた原因とは何であろうか。

## 6.2 考察

大正期以降、軍人、警察官の登場する読物が目立つようになる。そこでは以下のような部下への労いのことばが使われている。

「ギイギイ、ご苦勞だった。ご苦勞だった。よくやつた。もうおまへは少佐になつてもいいだらう。おまへの部下の叙勲はおまへにまかせる。」宮沢賢治（1924）鳥の北斗七星<sup>(8)</sup>

明治以降日本は徴兵制を導入し、国内外のいくつもの戦争を経ることになる。その肥大化していく軍隊の存在が、庶民の読物にまで影響を及ぼした。「御苦勞」系労い言葉もその一つではないか。江戸から明治に移り、新しい時代は古い時代の象徴を避け始めた。特にそれが著しかったのが軍隊である。明治の天皇直属の軍隊は、事実上の創設者大村益次郎と後継者で奇兵隊出身の山県有朋、さらにその支持母体である長州閥たちによって創り上げられたと言える。彼らは、世襲制の武士による戦闘組織である江戸期のものと、内容・意識ともに全く違ったものにするに腐心していた。そのための改革は、服・装備・戦闘法だけではなく言葉も含まれていた。その結果、明治以降軍隊特有の言葉が生まれてきた。その時に広く一般に使われていた「御苦勞」は、「大儀」という侍臭の強い語の代わりとして取り入れられたものであろう。

部下への労い言葉「御苦勞」は、軍隊を経て急速に広まり、読物に取り入れられたと見られる。さらに、時代小説の作者たちの何人かは、侍が部下を労う際の言葉としてもその語を使用した。

「おお源兵衛か今日のご苦勞」駿河守は頷いたが、「すぐに 射手（いて）に取りかかるよう」  
「かしこまりましてござります」。国枝史郎（1926）八ヶ岳の魔神<sup>(9)</sup>

例に挙げた国枝史郎らは、江戸の世界の復元を目指す者たちではなく、むしろ、西洋の小説の影響を受け、ひたすら量産し続けた作家たちであった<sup>(10)</sup>。したがって、江戸期の時代考証に基づいたものである必要はなく、大正・昭和に生きる人達に受けるものを書いていったと考えられる。しかし、読者はそれらの小説に出てくる身分の高い武士が言う「御苦勞であった」を主君が使う労い言葉と思ひ込んでしまったのではないだろうか。

## 7. まとめ

「御苦勞」は本来、目上にも目下にも仲間内にも用いられてきた。武士階級は部下には「大儀」を用いたが、町人は、目上だけではなく目下へも労いを丁寧さを表す「御」を付けて「御苦勞」と言ってきた。

青空文庫の幕末から1950年代までに労い表現として現れた数は、「お疲れ系」をはるかに上回るものであり、「ご苦勞系」が代表的労い言葉であったことがわかる。しかし、誰に対して発したかで分析してみると、大正期頃、目上への使用例数と目下（部下）への使用例数が逆転し、その後、時

代を経るに従いその差が開き続けている。この目下への使用というタイプのものは、明治時代以前には女性や一般的な町人の使用が多かったのに対し、大正以降では、軍人・警官が増えている。さらに通俗的時代小説にも大いに使われている。このことから、実際の軍隊での労い言葉「御苦労」が、徴兵男子を通じて国内に広まり、さらにそれが時代小説で多用されたことが、「もともと主君からの労いの言葉」という誤解の原因になったのではないか。最も一般的な労いの言葉は、上下関係の厳しい組織、例えば会社組織の中で、目上には使えないという神話が語り継がれ、現在に至ったのではないだろうか。

本来なら広い用途で使えるはずの「ご苦労系」は、現在、「目上が使う」という制限枠をはめられ、「お疲れ系」の便利さ、親しみやすさからの勢力拡大もあって、労いの言葉の代表の座を追われ、使用頻度を減らしてしまったと考えられる。

## 8. 今後の展望

本研究はまだ中間段階で、今後、年代別アンケート調査を行い、この語への使用に関する意識を見ていきたい。また、軍隊での使い方の実例を探し、軍隊が「御苦労」の変化に関わったか否かを明らかにするようなデータを集めたい。

### 謝 辞

本稿執筆においては、明海大学の井上史雄教授、桜井隆教授からのご指導とご示唆をいただきました。また、本学客員研究員の金順任さんに貴重なアドバイスをいただき完成を見たものです。ここに感謝の気持ちをお伝えします。

### 〈注〉

- (1) 水谷公弥（1976）には以下の記述がある。  
「ご苦労」は、元来、上の者が下の者に対して、せいぜい同輩同士で、労をねぎらう場合に使う。目下から目上に使うと失礼である。「さま」を付けたところで、その事情は変わらない。
- (2) [http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/yoronchousa/h17/kekka.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h17/kekka.html)
- (3) インターネットサイト青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) の検索による
- (4) 紙面の関係から関係箇所のみ抜き出す。また、大辞林第一版・二版は「御苦労様」を小見出し扱いで、「御苦労」の丁寧表現としているだけなので、言及を省く。
- (5) [www.kantei.go.jp/jp/singi/road/dai10/10gijiroku.palf.html](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/road/dai10/10gijiroku.palf.html)
- (6) 武藤禎夫校註（1987）『安永期小咄本集』に掲載
- (7) インターネットサイト青空文庫の検索による (<http://www.aozora.gr.jp/>)
- (8) インターネットサイト青空文庫の検索による (<http://www.aozora.gr.jp/>)
- (9) インターネットサイト青空文庫の検索による (<http://www.aozora.gr.jp/>)
- (10) 国枝に関しては Wikipedia「国枝史郎」を参考にした。その時代の作家に関しては、野崎六助（2010）『捕物帖の百年—歴史の光と影』 溪流社を参考にした。



## 参考文献

- 飯間浩明 (2003) 『遊ぶ日本語 不思議な日本語』 岩波書店 pp73-78
- 荻野貞樹 (2005) 『ほんとうの敬語』 PHP 研究所 pp137-140
- 中村孝士 (1979) 『サラリーマン・OLのしつけ学』 日本工業新聞社 p130
- 野崎六助 (2010) 『捕物帖の百年—歴史の光と影』 溪流社
- 藤村道生 (1961) 『山県有朋』 吉川弘文館
- 松浦玲 (1979) 『明治維新論』 現代評論社 pp143-151
- 水谷公弥 (1976) 『敬語に強くなる本』 エール出版 pp144-145
- 武藤禎夫校註 (1987) 安永期小咄本集 岩波書店
- 森下紀良 (1980) 『北満初年兵の生活日記』 三恵企画
- 岩波国語辞典五版 (1994)・六版 (2000) 岩波書店
- 学研国語大辞典初版 (1980)・二版 (1988) 学研
- 広辞苑 (第六版) 岩波書店 (2008)
- 三省堂国語辞典三版 (1982)・四版 (1992) 三省堂
- 集英社国語辞典初版 (1993) 集英社
- 新選国語辞典七版 (2000)・八版 (2002) 小学館
- 大辞林初版 (1988)・二版 (1995)・三版 (2006)
- 日本国語大辞典 (2001) 第二版 第五卷 小学館
- 明鏡国語辞典 (2002) 初版 大修館書店
- 青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/> (最終検索日 2010 年 12 月 14 日)
- 文化庁 (2006) 平成 17 年度「国語に関する世論調査」の結果について  
[http://www.bunka.go.jp/kakugo\\_nihongo/yoronchosa/kekka.html](http://www.bunka.go.jp/kakugo_nihongo/yoronchosa/kekka.html)
- Wikipedia「国枝史郎」<http://ja.wikipedia.org/>